

教材活用例(5) 「風を感じて―侍ハードラー 為末大―」 〔中学校第2学年 主題：生きる喜び 内容項目：3の(3)〕



(1) 開発資料の実際

ア 素材の説明

(ア) 素材の概要

〈素材―為末大さん―について〉

為末大さんは、ハードルの陸上選手である。世界陸上400mH（ハードル）で日本人初の銅メダルを獲得した。与えられた身体的な条件のもと、工夫して世界に通じる走法を生み出し、著書も出版している。

現在、アスリートたちをつなぎ合わせる組織を立ち上げている。



昭和53年 (1978年)	広島市佐伯区に誕生
平成5年 (1993年)	ジュニアオリンピック200m走日本中学記録
平成8年	200m走で後輩に敗れる。 インターハイ400m走・400mH日本高校記録
平成12年	日本学生選手権400mH日本学生記録 シドニーオリンピック予選出場
平成13年	エドモントン世界陸上日本記録 銅メダル獲得
平成16年	アテネオリンピック準決勝（ハードル日本人初出場）
平成17年	ヘルシンキ世界陸上 銅メダル獲得
平成20年	日本選手権優勝 北京オリンピック予選出場

為末大さんの経歴

(イ) 4コマ絵

著書やインタビューに基づいて、経歴を整理した。そして、為末さんの考え方や生き方が表れ、人間の魅力が伝わるエピソードを中心場面とし、それらの全てが生きる喜びであるということが伝わるように、場面を設定した。

	起	承	転	結
場面のイメージ絵				
絵の説明	小学校の時、駆けっこで1番になり決勝テープを切る。カール・ルイスがオリンピックで優勝する姿に感銘を受け、彼のようになりたいと決意する。	いつかは誰かに負けると思っていたが、高校時代について短距離走で後輩に負けて、トラックに1人仰向けになってしまう。	ハードルに活路を見出し、工夫と練習で、課題を克服していく。世界陸上では、日本人初の銅メダルを獲得する。	与えられた身体的な条件のもと、工夫しながらよりよくしていくことに、喜びと生きがいを感じ、充実した生活を送っている。

イ 資料の解説

【作成の要点】

中学生は多様なことに関心を抱き、ものごとの受け止め方や考え方も多様である。しかし、自己について、特に生きることについて深く考え、生きる喜びを感じているのだろうか。この時期に、自分の本当に求めるものについてしっかり考え、それに向かって努力することを楽しいと捉えることができれば、もっと自他を大事にして幸福を感じられるであろう。そこで、「生きる喜び」やそれを支える「目標への努力」・「感謝」などをねらいとした。

「生きる喜び」とは、困難にあっても乗り越える強さがあって、初めて味わうことができる。目標があり、それに向けての努力がなされ、さらにそれらを取り巻く全てに対する感謝の念があって、たどり着けるものである。為末さんの目標は、初めは勝つことであったが、長じるに伴って工夫と練習で課題を乗り越えていくことへと昇華されていった。生まれた国や、それを育む文化全体への感謝の念も、「生きる喜び」を強めている。

為末さんは人より成長が早かったこともあり、走るのが速かった。小学生の時に地域のスポーツ少年団に入って、練習に励んだ。いつも1番であることが当たり前で、中学生のときには記録保持者となった。15歳で成長が止まり高校生になって、いつかは人に抜かれると思いながらも、短距離の練習に励んでいた。県大会では、ついに後輩に負けてしまった。それは、限界を自覚することであり、同時にハードルに転向する契機でもあった。

自己を見つめて、さらにより高い目標を設定し、それに向かって工夫と努力を続けるという為末さんの姿は、生徒にとって、励みになることと思われる。また、充実した生き方をする喜びと、困難こそが喜びを大きくするということに気付けば、人として充実した人生を送ることができるであろう。機会を捉えて、常にその種まきをしていきたいものだ。

生徒はハードルについて、保健体育科で学習する。その知識を活かして授業を展開すると、理解が易しくなると考えられる。また、スポーツニュースなどで取り上げられるタイミングで行うのも好ましい。道徳通信や学級通信などで、授業の様子や生徒の感想などを紹介して、家庭でも話題にしてもらおうと、さらに効果的である。



【心に響くちょっといいはなし】

為末さんは、「駆けっこの神童」と呼ばれていた。中学三年生（15歳）時の200m走（21秒36）は、憧れのカール・ルイス（同年齢）よりも、速かった！

シドニーオリンピックでは、予想外の風にあおられて、転倒した。大会での初の転倒だった。その後、国外では会場によって風の吹き方が違うことを知り、それからは風などを計算に入れて競技に臨むようになった。

アスリートの多くは、日本では企業に所属しているが、世界では、一人で試合に臨みその結果に応じて、いわば賞金を稼ぐ。ぎりぎりの勝負精神を養うために、為末さんは企業を退職して、コーチもつけず、一人で世界各国の試合に出場して生活している。

また、クイズ番組で、一千万円を獲得した。陸上に親しんでもらおうと、東京都とタイアップして、一般道路で競技する「東京ストリート陸上」というパフォーマンスに、その賞金を使った。

現在、『為末大オフィシャルサイト「侍ハードラー」』というブログを立ち上げており、たくさんのファンの投稿が寄せられて、心のつながりを感じる交流の場になっている。

平成22年（2010年）10月からは、アスリートたちと社会をつなぐ社団法人「アスリートソサエティ」を立ち上げている。開演の挨拶は、現役で練習を続けているため、現住所であるアメリカからのテレビ電話でなされ「選手と社会をつなぐ場に」というメッセージが発せられた。

「風を感じて」 —侍ハードラー 為末大—



広島市に足の速い少年がいた。為末大だ。

駆けっこは、いつも一番。

小学生のときに、陸上のスポーツ少年団に入った。全力疾走すると、自分がむき出しになるような気がする。我を忘れる心地よさだ。

中学一年生のとき、カール・ルイスが世界陸上東京大会で、100mを人類初の9秒8台の記録で走った。かっこいい。速く走ることなら絶対に負けない。

このとき、「カール・ルイス計画」が始動した。

中学の陸上部へ入るときは、松葉杖だった。顧問の河野先生は、シャフトを使って腹筋や背筋を鍛える指導をした。為末は、ゴールテープを切る場面をイメージし続けた。

三年生になると、中学校全日本選手権の100m走と200m走で中学生日本一になった。だが、カール・ルイスのように「飛ぶように走り、ゴールを風のように駆けぬける」という、めざす走り方ができなかったと振り返る。終盤の失速を課題としていたのだ。思いは世界へ、そして理想の走り方へと向けられていた。

高校でも陸上を続けた。それは故障との戦いでもあった。また、15歳で体の成長が止まってからは、伸び盛りのライバルたちを、恐れていた。トラックで負けるなどということは、全人格を否定されること……。

高校三年生の県大会、200m走決勝でのことだった。ウォーミングアップやストレッチをし、いつものように準備を整えて、やや緊張しながらスタートラインに並んだ。号砲とともにダッシュし、全力で走った。だが、後ろからだんだんと地面を蹴る音が近づいてくる。息づかいが、もうすぐ隣に聞こえる。そうして、ふっと前に人の肩が出て、見る間に抜かれた。それからは、ゴールまでその背中が遠ざかっていくように感じられた。一瞬の出来事だったのだろうが、スローモーションを見るように、とてもゆっくりと感じられた。風が、止まっていた……。

それは、世界の大会でも国の大会でもなく、地元の広島地区でのこと。しかも相手は、同じ年でもない、高校の後輩だ。為末は、生きる場ともいえるフィールドに、四肢を投げ出して力なく仰向けになった。

「え？ 為末が負けた？」

「これって、初めての敗北じゃないの？」

「でも。また次、頑張ればいいよ。」

「もう無理かも。背もほかの人より、頭一つ分低いしね。」

「あのまま、動かないのかなあ。」

競技場の人たちは、口々に言い合った。

雲が空を覆い、風がざわめきを運び去っていく。

インターハイ⁽¹⁾では、監督の指示で、400m走に出場した。そして、優勝。

だがこれも、誰かに抜かれる日がくるかもしれない。もっと自分に向く種目はないか……。

目に留まったのが、ハードル。困難が多いほど、工夫次第で勝負できそうだ。

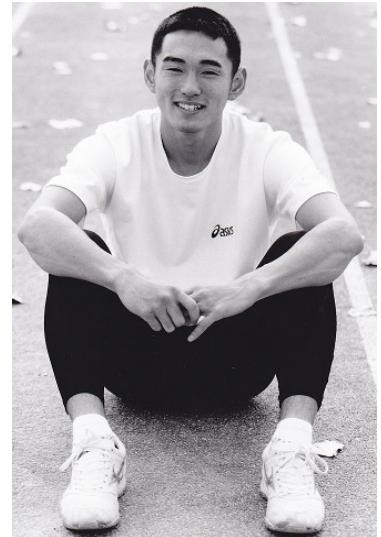
国体⁽²⁾では、400mハードルに出場し、何と、優勝した。しかも日本高校記録だという。世界のジュニア記録でも、歴代二位だ。今もこれを破るのは、至難の業とみられている。

それ以来、十年以上も、高さ91.4cmのハードルが35m間隔で10台並ぶこの競技に、全てを懸けている。

為末は、その後、オリンピックに三回出場し、世界陸上では、二回銅メダルを獲得した。ハードルの決勝で日本人がトラックに残ること自体が初めてだった。

カナダ・エドモントンでの47秒89というタイムは、日本記録だ。

人は、彼を「侍ハードラー」と呼ぶ。スタートから思い切り疾走するため、他の走者は為末の背中を見ながら走ることになる。走りっぷりの潔さが、「侍」と称されるゆえんだ。



為末は、語る。全てが、おもしろいと。

自分は、世界一を狙える身体を備えてはいない。アフリカ系のようなバネがあったら……と何度も思いながら、その度に自らを戒める。この国に生まれ、この文化の中で育ったからこそ、こんなに充実した陸上人生を送ってこられたのだ。

まず、走り方の意識を変える。前屈みになり、倒れそうになる寸前に足を出す。欧米人は骨盤が正面を向いているが、日本人はやや上を向いている。上に逃げがちな力を無駄なく前へもっていくためには「下へ押さえ込む意識」が必要だ。つまり「生まれ持った骨格のために足が遅い」という現実には、「その点を修正すれば足が速くなる」という可能性のことなのだ。

次に、体をどうやって最大限に生かすかを考える。1000分の1秒でも速くなるために、どんなトレーニングをして、どんな体の動かし方を会得するか。五感を信じて、神経を研ぎ澄まし、技を高めていく。これは、典型的な職人気質⁽³⁾の日本人流である。楽しいやり方を知ってしまった。体任せの競技人生など満足できない。100に生まれついた身体能力の者が、75しか発揮できない例は多い。それなら指数50の日本人は、何とか工夫して75まで上積みしていけばいい。それなら対等に戦える。こんな愉快なことはないと思う。

さらに、欧米流の筋力アップをする一方で、すり足のような日本流の走り方をする。すると、ハードルを越えるとき、無駄に跳ねなくてすむようになった。

また、1年余りハードルを跳ばないという常識外れの実験を試みる。走力があがった。

試合で雨が降れば、悪天候下での経験も積んできたこっちのものだ。各国の若い選手は力が出せないと肩を落としているが、このときこそチャンス。「勝てる」と信じて、何度もゴールまでのストーリーを思い描く。

ハイスピードで録画した映像で見ると、ハードルを越えるとき、頭が水平に推移しているのが分かる。わずか0.3秒の間に、跳ね上げた足を弛緩⁽⁴⁾させ、蹴り上げた足がバーに当たりそうになるとこ

ろで骨盤をずらして滑るように越える。同時に次のハードルまでの歩数を、1 cm 単位で計算する。何とそのとき、一休みしているのだという。

そうやって、何万回と着地するなかで、地面についた足の上に骨盤が乗り込み、体がスーッと前に進んでいく感覚をつかむことができた。

やった。これが、走りの極意だ。

まだまだ自分には、試してみる部分がいくらかもある。

ハードルを越える息継ぎの瞬間が、心地よい。為末は、体をよぎる風を、感じるという。



「東京ストリート陸上」の一場面

【注】

- (1) 全国高等学校総合体育大会のこと。競技種目別の学校対抗で、年に2回、夏季と冬季に開催される。陸上競技は夏季大会で行われる。
- (2) 国民体育大会のこと。各都道府県持ち回り方式で毎年開催されており、第3回から都道府県対抗となり男女の総合優勝にはそれぞれ天皇杯と皇后杯が授与されている。
- (3) 職人に特有の、頑固だが実直に究めるという性質。
- (4) ゆるみ、たるむこと。

【参考文献】

- 為末大（著）「インベストメントハードラー」講談社（2006）
為末大（著）「日本人の足を速くする」新潮新書（2007）
為末大（著）「走りの極意」ベースボールマガジン社（2007）

エ 授業展開例 ー学習指導案（略案）ー

困難を克服する為末の姿から生きる喜びについての考えを深める展開A
～ 書く活動を中心にした指導 ～

(ア) 主題名 生きる喜び 3ー(3)

(イ) ねらい 勝ち続けていた短距離走で後輩に敗れてハードルに転向し、その後の陸上人生に喜びを感じている為末の生き様を通して、生きる喜びについての考えを深め、人間として生きることの喜びを見いだそうとする道徳的心情を養う。

(ウ) 資料名 「風を感じて 一侍ハードラー 為末大」

(エ) 学習指導過程

	学習活動	主な発問と生徒の心の動き	留意点 (☆評価の観点)
導入	1 自分の夢を考える。	○ 自分の夢は何だろう。その実現のためにはどうしたらいいだろう。 ・志望校に合格する。勉強する。 ・希望の職業に就く。努力する。	○ 事前にアンケートを取っておき効果的に活用してもよい。
展開	2 後輩に敗れるまでを読んで、為末の短距離走にかける強い思いを考える。	○ カール・ルイス計画には、どんな思いがあるのだろう。 ・世界で勝負し、金メダルを獲る。 ○ 後輩に負けたとき、どんなことを考えていたのだろう。 ・悔しい。ショックだ。 ・全人格を否定された。	○ 為末の短距離走への強い思いを確認させる。 ○ ワークシート1に記入させる(発表に際して挙手がないときは色カードを配付し、「この後短距離走を続けるか(青)、続けないか(赤)」に色分けして掲げさせても良い)。
	3 資料後半を読んで、為末の生きる喜びについて考える。	○ 「全てがおもしろい」と言っているが、どんなことが面白いのだろう。 ・工夫して速く走るようになること。 ・雨など悪条件は、勝機と捉えること。 ◎ 「風を感じて」走る為末は、どんな思いなのだろう。 ・風と一体になったようだ。 ・ハードルと出会って良かった。ずっと陸上を続けていこう。 ・与えられた体を、工夫によって世界と戦えるようにするのは楽しい。	○ ワークシート2に書かせて自分の考えをはっきりさせる。 ☆ 人間には弱さがあっても、それを乗り越えていける気高さがあるということを理解し、自分のこととしてとらえているか。
	4 自分の生き方を振り返る。	○ 為末の生き方と自分の生き方を関わらせて感想を書こう。 ・ショックを味わった方が、努力して喜びが大きくなる。 ・同じ事も、意識の持ち方で、幸福に感じるものなのだなあ。 ・自分も、目標に向かって努力し、幸せになるように生きていきたい。	○ ワークシート3に書かせて為末と自分とを重ねて見つめさせ、ねらいに迫る。その際、体育祭や合唱祭、部活動など、苦勞するほど喜びが大きくなっていった体験を想起させる。
終末	5 教師の説話を聞く。	○ 「蓮、泥中より出でて芳し」の話を聞こう。 (泥を汚いと受け止めるか、有り難いと受け止めるか。生きる喜びとはどんなことか。)	○ 余韻をもって終わらせる。

「充実した陸上人生」という言葉に着目し、感謝して生きる為末の姿を通して
ねらいに迫る展開B ～ 話し合い活動を中心にした指導 ～

(ア) 主題名 感謝 2－(6)

(イ) ねらい 世界の陸上競技で金メダルを獲ることは身体的に困難だが、日本に生まれたことに感謝し工夫と努力で競技人生を送る為末の姿を通して、感謝についての考えを深め、それを大切にしようとする道徳的心情を養う。

(ウ) 資料名 「風を感じて 一侍ハードラー 為末大」

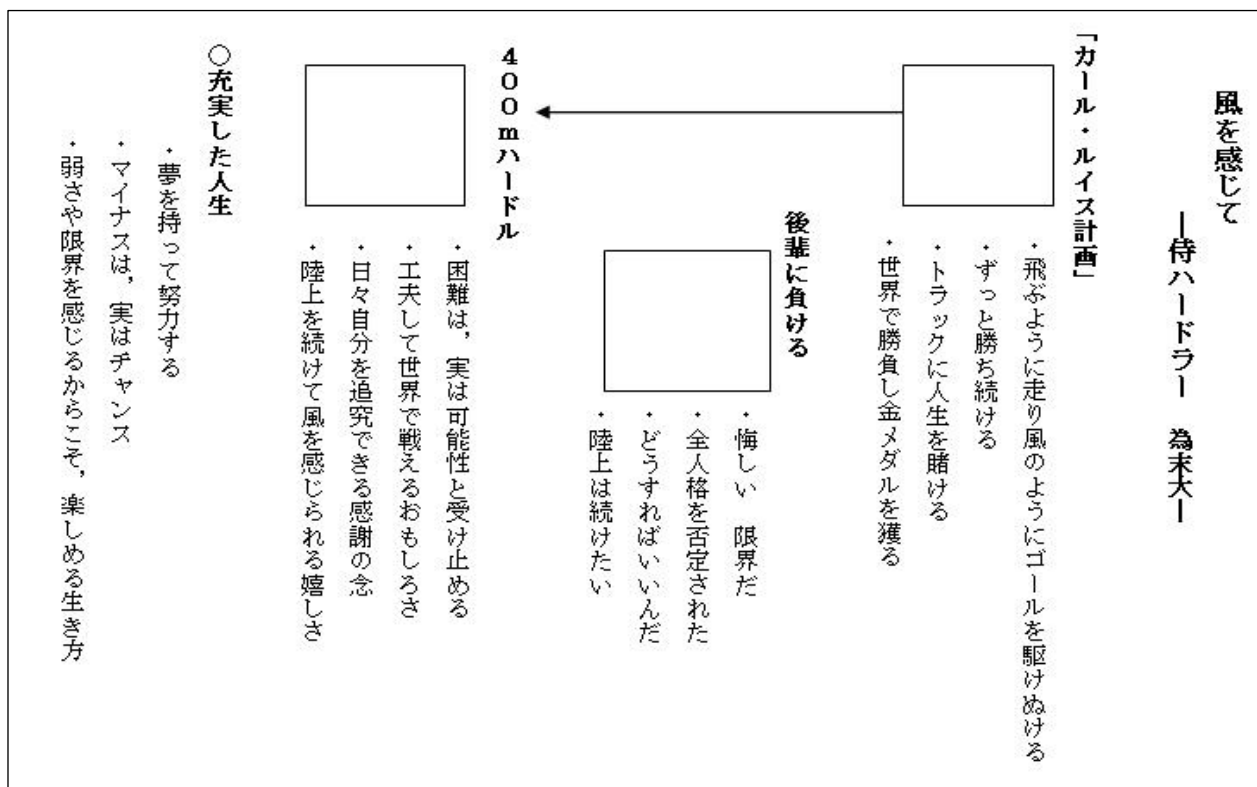
(エ) 学習指導過程

	学 習 活 動	主な発問と生徒の心の動き	留 意 点 (☆評価の観点)
導 入	1 陸上競技について想起する。	○ 400mハードル走とは、どんな競技だっただろう。	○ 保健体育科の学習と関連付けて、資料への興味付けをする。35mの距離を確認する。
展 開	2 短距離走で後輩に負けるまでを読んで、為末の気持ちを考える。 3 「充実した陸上人生」という為末のことばには、どんな思いがあるかを考える。	○ 短距離走で後輩に負けてトラックにうずくまった為末は、その後陸上を続けるだろうか。 ＜やめる＞ ・やはり負けた。もう勝ち目はない。 ・勝てないのなら、自分ではない。 ・全人格を否定された。 ＜続ける＞ ・ずっとやってきたので、このままではやめられない。 ・どこがいけないか反省して、さらに速く走る練習をする。 ・他の種目もやってみる。 ○ 銅メダルを獲得したときの気持ちを話し合おう。 ・種目は変えたけど、続けて良かった。 ・昔からの目標が達成できて嬉しい。 ◎ 「充実した陸上人生」という為末のことばには、どんな思いがあるか。 ・日本に生まれその文化に育ったおかげで今の自分がある。 ・「侍」の潔さが自分の走りに備わっていることを誇らしく思える。 ・もし日本人でなかったら、走り方を工夫してという楽しみを味わえなかっただろう。 ・日本流の職人気質が身に付いていることに感謝している。 ・たくさんの人のおかげだから感謝している。	○ 為末は陸上を止める(右)か続ける(左)か、黒板にネームプレートを貼って意思表示させ(中心ほど迷いがあり、離れるほど強いという強弱をつける)、その理由を発表させる。 ○ 付箋紙に書いて、少人数のグループで一人ずつ台紙に貼り出しながら、考えを言わせていく。 ○ 補助発問などにより、家族等応援や支援をしてくれる人まで幅広く考えさせていく。 ☆ 充実感の根底にあるものを自分なりに考え、為末の感謝に対する見方や考え方を自分なりにとらえることができたか。
終 末	4 教師の説話を聞く。	○ 話を聞き、感想を書こう。	○ 成功体験でも失敗体験でも良いが、感謝につながるよう留意する。

(才) 資料分析表

競技場面	登場人物の行状	主人公の心情	生徒の意識の流れ
○駆けこぎ	・いつも一徹。 ・スガ少で練習する。	駆けっこ ・全力疾走すると自分からも出しこなる快感があるなあ。	・走ることが好きなんだな。 ・自分にも好きなことがある。
○カール・ルイスが100m走で金メダル獲得。	・カール・ルイス計画を立てる。	憧れ ・格好いいなあ。 ・自分も世界で勝りたい。 ・オリンピックでメダルを獲りたい。	・カール・ルイスみたいにメダルを獲りたいんだな。 ・自分にも憧れる人物がいるなあ。
○短距離走で後輩に負ける。	・そのままグランドに仰向けになる。	敗北 ・悔しい。 ・受け入れられない。 ・全人格を否定された。 ・どうすればいいんだ。	・相当なショックなんだろ。 ・もう陸上を止めてしまおうかな。 ・全人格を否定されるとは、どんな気持ちなのだろう。
○400mハードルに転向する。	・世界陸上で銅メダルを獲得し記録を破す。	ハードル ・ハードルは工夫次第で世界と勝負できる。 ・オリンピックを目指して頑張ろう。	・陸上が生きることに同じなんだな。 ・子どもの頃の夢を達成できたんだな。 ・種目は変わっただけで、諦めずにやり続けるのは素晴らしいな。 ・自分も目標に向かって努力を続けたい。
○工夫して練習する陸上人生を送る。	・走り方の極意をつかむ。 ・限界まで試し続ける。 ・ハードルを越える瞬間が心地よい。	充実した人生 ・ハードルをやって良かった。 ・ずっと陸上を続けたい。 ・工夫と練習で世界と戦えるのはねもしい。 ・日本に生まれその文化に育ったことに感謝する。 ・充実した陸上人生を送れるのは幸せだ。 ・まだまだ試してみたいことがある。 ・陸上を止めたい。	・食べたショックが次の世界を駆けろきこけになったんだな。 ・自分を叩きめて工夫し、努力したから人生が充実しているんだな。 ・一生懸命生きていることは、幸せなんだな。 ・感謝の気持ちば、喜びを大きくするのだな。 ・辛い思いが大きいと喜びも大きくなるのだな。

(力) 板書計画



【板書の構成】

資料の前半を読んではじめに、子どもの頃からずっと一番だった場面を示し、為末の短距離走にかけ姿を生徒のことばでまとめていく。また、「カール・ルイス計画」などの見出しは短冊にして貼ったり、黄色チョークで書いたりすると分かりやすい。

次に、後輩に敗れる場面をやや下にし、そのときの思いを板書する。

その後、為末さんはどうするかを考えさせてから、資料の後半を読み、400mハードルに転向して、工夫して充実した陸上人生を送る場面を左上に掲げ、その心中を発表させて視覚的に意識できるように要約する。

そして、ただ勝つことが喜びだったはじめのころと、敗北を乗り越えて日々工夫を重ねていくことに喜びを見出すようになった現在との変化を意識できるように、矢印で示す。

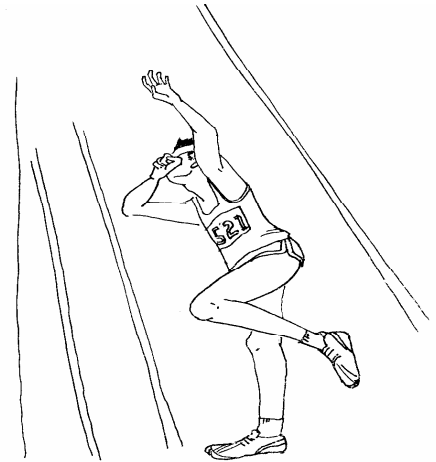
最後に、為末さんが感じている「生きる喜び」と関わらせて、自分の生き方について考えを深めることができるように「充実した人生」というキーワードでまとめる。

(キ) ワークシート

「 画を聴いて ― 特バードン 未来太 ― 」

組 番 名前

- I 後書きに書きたーにシムに毎回たになつたしもの未来太とぞ、むななうを聴きたーたのたーい。



- II 画を聴いたむななうの練習かむしもの未来太とぞ、むななうを聴きたーたのたーい。

- III 未来太とのまむたし面からまむたを聴きたーい、聴きたーい。

(2) 活用のポイント

中学生という義務教育を終えていくこの時期の生徒にとって、よりよい生き方を目指す姿勢ができれば、生きることに喜びを見いだせるだろう。そこで、陸上競技という身体的な要因が大きく左右する世界で、「困難とは可能性のことだ」と受け止めて自らを試しながら充実した人生を送っている為末さんの生き方に触れ、その思考的な追体験をさせてやりたい。

指導に当たっては、世界陸上のメダリストという自分とかけ離れた存在として受け止めるのではなく、考え方や生き方から学びたいと思わせるようにしたい。生徒は部活動や体育祭、合唱祭などで目標を掲げて取り組み、成功したり失敗したりして、限界や達成感を味わっている。そういう身近な体験を想起させながら活用していくとよい。

また、1-(2)「強い意志」・1-(5)「個性の伸長」や、2-(6)「感謝」・4-(8)「郷土の発展」・4-(9)(10)「日本人としての自覚」というそれぞれのねらいで指導展開することも可能である。その場合、その道徳的価値について、十分考え、生徒の言葉にしてまとめおきたい。

ア 発問の工夫

為末さんは実際には、挫折したことがないと言われているが、敢えて挫折というならば、陸上の王道と信じていた短距離走からハードルに転向したことが、唯一それにあたる。そこで、どんなに短距離走への思いが強かったかを発問によって明確にしておくことで、その後の陸上人生について深く考えることができる。

資料は分割して提示する。後輩に負けてから、インターハイに出場するまでに、どんなことを考えたり感じたりしているかを、しっかり考えさせたい。そのため、その部分は、意図的に記述を省略してある。生徒が、自分自身の考えをまとめ、自覚できるような発問としたい。少数だが、学級で為末さんがハードル走者であると知っている生徒もいるが、展開に添って思考を深めることができる。

ねらいに迫るために「風を感じて」練習する為末さんの心中をしっかりと考えさせ、「生きる喜び」

につなげるようにしたい。

イ 活動の工夫

「書く」活動を中心に行っているA案では、短距離走で世界を目指していたのに、広島地区というレベルでしかも後輩に負けるという、生徒にとって身近に感じられる部分で、挫折感を各個人で追体験させておき、中心発問での思考を印象付けたい。

また、体育祭や合唱祭などで頑張った分だけ達成感や充実感があることを、学級の実態に応じて想起させるとよい。例え、思い通りの結果にならなくても、体験から得るものがある。

「話し合い」を中心に行っているB案では、その時間を確保するために、事前に競技を具体的にイメージさせておきたい。例えば、ハードル間35mを廊下で示したり、ハードルの高さを教卓で示したりするなどイメージをもたせる工夫をしたい。

話し合いの手がかりとして、ネームプレートや付箋紙などで全員に意思表示させて意見を出させると、多くの生徒が発言しやすくなる。

ウ 臨場感をもたせるための工夫

○ アンケート

生きる喜びは、夢が実現すると実感しやすい。事前に、夢やそれを実現するためにしていることなどを尋ねておき、導入で活用すると内容を自分に引きつけやすくなるとともに、興味をもって内容に引き込まれていきやすい。また、題材と関連している好きなスポーツのベスト3を発表すると、身近に感じやすい。

○ 画像

場面絵を用いる。可能であれば、オリンピックや世界陸上の短距離走の決勝シーンがあると、困難な状況に挑むことから生じる生きる喜びについての理解を促しやすい。

エ まとめの工夫

生徒の多くは、夢を諦めないことや努力といった面に目が向きがちである。だが、「生きる喜び」は、それらを含む全ての過程から生じる。そのことに気付かせるための工夫をしたい。発問や書く

活動等を通して、ねらいに迫っていくが、終末のまとめとして、指導者の生き様をも踏まえたおさえをしたいものである。教師の人間性がにじみ出る説話は、生徒の心情に訴え、深い感銘を与えることができる。そのことにより、生徒はねらいの根底にある道徳的価値を一層主体的にとらえ、人間としての生き方についての自覚を深めることができるものと考ええる。

A案では、蓮が泥から咲き出ているながら芳しいということを取り上げ、同じ泥も、汚いと受け止めると嫌な存在であるが、栄養源ととらえればありがたい存在となるという、受け止め方の示唆をして余韻をもって終われるような展開とした。その他体験談など、適切な説話を取り入れることも効果的である。

また、授業後に生徒がしっかりと考えたことについて肯定的に評価することも大切である。心のノートの活用や、学級通信での紹介も行いたい。

(3) 授業の実際

ア 発問の工夫

為末さんは、敗北を契機に転向して充実した生き方に至っているのです、敗北感に共感させるためにカール・ルイス計画への思いについて発問した。生徒たちは、ボルトをよく知っているのです、援用するとイメージしやすかったようである。

中心発問では、工夫し続ける生き方の良さを考えさせた。「風と一体になって走っているような感じがして気持ちがいい。」「陸上の楽しさを知ることができた。」「いろんなことを探りながら走るのがおもしろい。」「技を高めていくことの楽しさを知った。」「自分の体をどうやって最大限に生かすかを考えている。」などの肯定的な反応が多かった。

イ 活動の工夫

「書く」活動を中心にしたA案の後輩に敗れたシーンでは、「プライドが傷ついて悔しい。全人格を否定され生きがいをなくした。もう陸上はしたくないと投げ出した。」という反応が多かった。

「話し合い」を中心にしたB案の同じシーンでは同様な発言とともに、「なんで負けたのだろう。自分の力不足だ。もっと練習すれば勝てたかも知れない。」という発言もみられ、「何やってるんだろう。こんなことでは、世界で金を獲るという夢はどうなるんだ。」「もっと頑張って、また勝ってやる。」という方向へまとまっていった。

ネームプレートでの意思表示は、強弱をつけた。中心軸ほど迷いがあり、左右の端になるほどそれぞれの意思が強い。その代表の三者に意見を求めるなど、意図的な指名により、多様な考えを交流することができた。

書く活動と話し合う活動を組み合わせて、実態に応じて柔軟で効果的な展開も工夫したい。

ウ 臨場感をもたせるための工夫

○ アンケート

「夢やそれを実現するためにすること」については、「行きたい高校に合格する。そのために勉強する」と、「やりたい仕事に就く。そのために努力する。資格を取る。」(3年生)が多かった。具体的な人数を発表することにより、興味をもち自分と比較して考えることができ、集中して内容に入っていくことができた。

○ 画像

はじめの勝つシーンでは、資料中の写真(中学生時)を場面絵として示した。挫折場面と風を感じながらハードルを越える場面では、本資料(1)ア(イ)「4コマ絵」を拡大し、彩色して用いた。板書がすっきりするので、「今、何を考えているか」が明確になった。また、変化を矢印で示すと、喜びが、勝つだけでなく工夫する過程の全てを意味するようになるということが、理解しやすくなった。

エ まとめの工夫

生徒の感想に、「為末さんのように、いろんなことを失敗したり、経験したりすることで、また新しいことを学ぶような生き方は、すごいと思った。私もそのような生き方がしたい。」「風を感じて走

るとき、悟りを開いたようにすがすがしく何もかもがおもしろくて楽しいと思う。為末さんが本当に楽しそう。」「楽しく自分の人生を満喫できるのが一番だと思うけど、世の中そうならないことだってある。辛いという思いもなければいけないと思う。」「自分も後輩に抜かされたけど、やめてしまった。」など、為末さんの生き様を自分に引きつけて学ぶ多様な記述がみられた。

特に、「自分も後輩に抜かされたけど、やめてしまった。」の記述は、それまでやめた理由を語ることのなかった生徒が自己を振り返り自らの弱さ吐露したものである。それは、為末さんの生き様を通して、自らの生きる意味や自己の存在価値を問い、次に進もうとするきっかけにしたものであると受け止めたい。これを手がかりに、その生徒への関わりを広げていくことができる。

授業後、「道徳通信」に、資料の内容を要約して生徒の記述を掲載した。生徒は自分の文章を探したり、人の考えを知ろうとしていた。また、他の教師と情報を共有できる。保護者は、子どもが学校でどんなことを学習し、どう受けとめているかを知ることができる。そういった積み重ねをしていくことで、子どもと保護者と教師との信頼関係を築くことにもなる。保護者の中には、3年間の子どもの記述から、その成長を実感するという方もあった。

（４）各教科等（体験活動を含む）との関連

保健体育科において、短距離走は、頻繁に行われる。ハードルの授業は、1年生や2年生で全生徒が学習する。ハードル間の歩数や、跳ねすぎないための姿勢など、実際に体験したあとに本資料で授業をすると、身近なこととして考えることができる。

キャリア教育の一環として、総合的な学習の時間に進路学習をする学校が多い。将来を見通して希望する職業やそれに就くための道のりを考えさせるときに、生き方について深く考えさせたい。人としてよりよく生きることについて常に考えさせることで、その状況や年齢に応じた答えを模索していけるであろう。そのカリキュラム全体の中に、本資料の活用を計画すると効果的である。

体育祭や合唱祭など、生徒が目標をもって取り組む学校行事では、生徒一人一人の姿や想いを見つめておきたい。必ず頑張った分だけ達成感や充実感をもつものである。可能であれば、映像を保存しておき導入や終末で活用することもできる。例えば頑張らなくて失敗しても、そのことを振り返ることができれば、それは失敗にはならない。そこから学ぶものがあるはずである。

（５）心のノートの活用

「心のノート」PP. 80-81の「かみしめたい 人間として生きる すばらしさ」を活用したい。見開きいっぱいにはさわやかな風が感じられる。草むらの少年への光は、未来を感じさせる。「生きる喜びとはなんだろう」という問いが示されている。「人間として生きること」として記された詩を見るたびに、生徒は授業で考えたことを想起することであろう。機会あるごとに開きたいものである。

